だが、その裏には人には言えない秘密があった。蛯名への殺意。私と佐和子さんには、暗黙の殺意があった。佐和子さんへの嫉妬心。蛯名から佐和子さんを取り戻したい。
そういう気持があった。あともうひとつ、気掛かりなことがあった。佐和子さんと関係した兄と蛯名は、同じような状況で亡くなっている。私自身もそうなるのかと不安になっていた。
佐和子さんはそんなの考え過ぎよ、と一笑に付した。あなただけは特別よ、あなたは大事なペットなんだから、と言いまくられた。
確かに彼女から見れば、私は檻に入った性豪のようである。佐和子さんは、お兄さんはあなたに嫉妬してたんじゃないかしら、と言う。確かに兄は私の性器を見ては、よく自分の股間を気にしていた。その時私は意味が分からなかった。私はうなずくだけであった。
　忘れもしない。次女の夏子はあなたの子よと、佐和子さんが私に告白したのは、佐和子さんが亡くなる日の前の日だった。
　夏子がそれを体でしっかりと受け止めてくれるかどうかは、明日になってみなければわからない。私はその時気が動転していて、そう思うしかなかったのである。